

京鹿子

創刊二十五年
一九八九年一月一日發行
第一一八號

2月号

豊 田 都 峰

渥 響 集 その十八

字 の 名 を も ら ひ 近 々 眠 る 山
日 を 沈 め 月 を 沈 め て 山 眠 る
落 葉 す る 水 の 音 あ る 方 に の み
川 は さ む 妹 背 の 山 の 上 ぐ 冬 日
海 光 を あ ま す こ と な く み か ん 山
島 空 の あ を さ も ろ と も 蜜 柑 狩



首のべて足のべ茜いろの鶴
丹頂を先立て天の鶴となる
冬晴の磴三段に神います
歳晩や曲り曲りて遠去かる
雪ばんば賽の河原の辻あたり
寒鴉また場移りの群れさわぎ
葦枯れてただそれだけの湖国なる
湖北なるひとりに葦の枯れつくす

初みくじ
丸山佳子



初 曆 日 進 月 歩 遊 ぶ 日 な し
初 み く じ 相 性 言 は 人 間 の み
雪 解 風 男 に も 見 る 乱 れ 髪
今 さ ら と あ い さ つ 申 す 事 始
大 枯 木 米 つ ぶ 程 が あ な か し こ

秀華採集

女郎蜘蛛人の体温下げてゐる

木山杏理

女郎蜘蛛は大形で黒紅緑黄などの色も不気味。見ることを「体温を下げ」としたことで、対象のもつ雰囲気を間接的表現に成功している。

吉備津彦に祓はる男の子七五三

山中志津子

大輪の菊を育てて佛彫る

浅野香澄

前句、吉備といえは桃太郎、七五三を具体的に浮かび上がらせている。後句は、上中と下との切れがよく、下五の「佛」の端正な姿までが浮ぶ。

鈴鹿 仁

初 茜

神丘に吉の名ありて初茜

年立つや博士のやうな猫の髭

初雪を抱く比叡の日を得たり

一筆のしづくに念ひ初硯

数へ日へ追ひつめてゆく町の騒

近 詠

和田 照海

鷹 柱

佐多指してかたぶきそめし鷹柱

鯉飛んでとんで夕日の水あやに

船かげは波ににじまず波止小春

水おとの届く綿虫日和かな

父の釘ぬいて猪垣つくろひし

神麓集



声明や樂のふるさと笹子鳴く
 声明は寺の音楽初樂す
 寺を出し初音は平家琵琶となり
 原点は魚山声明初うぐひす
 声明の歌舞伎浄瑠璃冬ひばり

林 日 圓

動かない酸素下さい星月夜
 あの世とは四五軒先の照紅葉
 百傷の心に滲みる秋風鈴
 桐一葉何処に住まふと仮の宿
 仏心が重くてならぬ夜長月

松 田 都 青

十三夜 北村 香朗
 晩酌に日柄もよしと十三夜
 下弦の月山の端を今離れたる
 銀座には横文字増えし菊日和
 銀座三越大増床の秋日和
 天高し道路元標 日本橋

病み暮るゝほどなく冬至来たりけり
 冬至湯を両手で掴み明日を待つ
 冬至湯と呼ばれて柚子の二つ三つ
 年の瀬や窓一色の雪景色

高 木 智

切干日和 藤岡 紫水
 海は照り岬は戻る初しぐれ
 海彦に一番海苔の艶供ふ
 谷戸四・五戸切干日和の佳き日かな
 一と塩が決める逸品冬菜漬
 小蝦のみ吐きては暮れの竹瓮舟

風呂敷に丹波の木実茜雲
 熱爛や男が本音で話す顔
 自画像の右眼が細し冬の虹
 冬瓜の中は明るい星座かも
 一枚の落葉となりゆくまでの時間

服 部 郁 史

神麓集



はしり蕎麦

丹生をだまき

骨董のそば猪口添へてはしり蕎麦
ボジョレヌーボー立ち飲みしてゐる出来心
白萩や聖観音のひねり腰
「長明」の方丈の趾通草熟る
鰻屋のあるじの欠伸秋土用

山田をがたま

小春日をのがさじと試歩に精を出す
冬陽浴び百歩歩ける吾を褒む
夕ぐれはもの淋しまして時雨るれば
書き出しは一樣にもう師走と文
打撲痛に耐へはやばやと冬籠り

臨終の瞳

竹貫示虹

捨て畑の老梅時をあやまたず
冏塚の首戀ふ野づら冴え返る
利休忌や死を賜ふ世のおそろしき
二月盡臨終の句を急がねば
薄氷に地だんだ踏み反抗期

瞬の夕映え

北川孝子

探求派自認して居り紅葉散る
東寺の塔瞬の夕映え見届けぬ
冬立てり茜ぼかしに雲西へ
立冬の帽を目深にたたずめり
月名残いま焼香のしんがり

霧

柴田朱美

病との馴れあいつづき霧の夜
束の間の十国峠に霧奔る
霧が霧よびて瘦身なほ細く
捨て墓の石ともなれず霧まとふ
顛末を霧に隠してたくらめり

小春の黙

伊藤希眸

枯るるには間のあり夕陽に黙のあり
進路決む父母へ黙つて晦日月
冬紅葉黙吟をして大路くる
黙禱を小春に忘れ千鳥ヶ淵
仁王の足ふつくら黙し小春なり

芒原丸井巴水
日没や何処へも行けぬ冬木立
嫌はれてゐるやも知れぬ衣被
胡桃餅旧街道は山へ入る
鳴き砂を一夜濡らせり神の旅
血の臭ひどこにも無くて芒原

酩酊気分 川崎光一郎
名月が蠟ふ酩酊気分かな
晩年は自然体なりとろろ汁
朝露の煌きながら消えにけり
真葛原恋の方程式解けず
長き夜の枕にひびく鼓動音

小堀寛
しほからの眼に住めり百少年
ままごとのご主人きざむ赤まんま
葉脈か魚のほねか秋の声
クレーンの嘴語りだす冬茜
心臓の扉いちまい冬構





京鹿子集

豊田都峰選

冬夕焼座礮してゐる縄梯子

東京 木山 杏理

昏みつつ鋒の音して吾亦紅

大輪の菊を育てて佛彫る
遠三上まで秋の野をつなぐ水

望郷のめもじとなりぬ残り柚子

砂漠町心磨きて秋迎ふ

江戸 伊吹 之博

女郎蜘蛛人の体温下げてゐる

吉備津彦に祓はる男の子七五三

京田辺 山中志津子

蜻蛉の高さで作詞作曲中

秋の午後掌大きハウスキーパー
アリゾナの秋は短しリス多忙

休止符をしんがりとして小鳥来る

霜月や娘の誕生日赤マルす
境内に光が差して照紅葉

澁川 東 秋茄子

金木犀闇に流れのありにけり

みちのくの届き香るは菊臍

そばの花伊吹すそ野の日のかげり

草津 浅野 香澄

二川合ふ堰の高鳴り鳥渡る

黄の色の香りは高く菊臍
食細くとこぼす夫にとろろ汁